

2024年8月6日（火）の予定 【主催：平和の祈り巡礼（大阪）】

代表者 鎌田厚志（鹿児島市 曹洞宗 直指庵住職）

14:30 浄春寺様集合（大阪市天王寺区夕陽丘町）

- ・着替えと行程の説明
- ・広島の被爆直後の映像を視聴します。貴重な映像を保管されている日映映像様が関東から来阪され、映写してくださいます（約20分）。
- ・15:00ごろに出発（平和を祈り、静かに歩きます）

15:10 四天王寺様参拝

- ・四天王寺は「和を以て尊しと為す」と十七条憲法で示された聖徳太子創建の寺院です。
- ・四天王寺内の英靈堂で祈ります。
- ・アメリカから、ジェイ・コグラン様とウェスター大司教様が来日され、このお堂内でお話をいただきます（お2人については次ページ参照）。

15:30 四天王寺様を出発

- ・清水坂、下寺町へと進み、いくつかの寺院で休憩をとりながら歩きます。

17:30 カトリック玉造教会様に到着

- ・大阪カテドラル聖マリア大聖堂に入れていただき、祈ります。
- ・前田万葉大司教様からお話をいただける予定です。

18:00 解散

（集合場所であった浄春寺様に荷物を置かれてきた方は、タクシーに相乗りをして浄春寺様へ戻ります。着替えもできます）

諸注意

- ・猛暑が予想されますので、複数の休息場所（冷房のある部屋）を準備しており、何度も休憩をとります。ただし熱中症対策は個々の責任において十分になさってください。
- ・万一のときのため、伴走車も準備しておきます。
- ・歩行のコースは、地元警察に届けています。

☆ 参加に関するお問い合わせは、下記にご連絡ください。

曹洞宗 浄春寺住職 佐藤徹亮 TEL 090-9986-2764 (大阪府大阪市)
浄土宗 正明寺住職 森 俊英 TEL 090-6979-2661 (大阪府堺市)

ジェイ・コグラン様

NPO 団体「ニュークリア・ウォッチ・ニューメキシコ」代表

ロスアラモス国立研究所をはじめ、アメリカの核開発の最前線を監視する。

登山家であり、少年時代に富士山を登頂。

ジョン C・ウェスター大司教様

アメリカ西部ニューメキシコ州を管轄するカトリック、サンタフェの大司教。

2017 年に広島・長崎を訪問。アメリカ核開発の拠点でもあるサンタフェから核廃絶の為の書簡をアメリカ政府に提出。

なお、2022 年にピースプラットホーム（事務局 森 俊英）が作成したビデオメッセージに、お 2 人が出演してくださっています。下記が、その YouTube アドレスです。

<https://youtu.be/ZWrFwrDskHU>

「死者の民主主義」

ウェスター大司教については、下記の記事も参照ください。

『東京新聞 WEB』（2022 年 2 月 14 日）<https://www.tokyo-np.co.jp/article/160122>

人類史上初の核実験が行われた米西部ニューメキシコ州でカトリック教会の最高位を務めるジョン・ウェスター大司教（71）が先月、核軍縮を訴える約 50 ページの手紙を米政府などに送った。ウェスター氏は取材に、広島と長崎訪問が一つのきっかけになったと語り、「核関連施設が集中するこの地から声を上げる意味は大きい。沈黙は破滅につながる」と強調した。（ニューヨーク・杉藤貴浩）

◆広島、長崎に訪問「悲惨さが身に染みた」

大司教はカトリック教会でローマ教皇（法王）と枢機卿に次ぐ地位。カトリックは核廃絶を訴えているが、米国の核開発の中心で原爆を開発したロスアラモス国立研究所などがあり、多くの信者も働くニューメキシコ州から高位聖職者が核軍縮を求めるのは珍しい。

ウェスター氏は、2017 年に休暇で「前から行きたいと思っていた」という広島と長崎を訪

問。原爆ドームや被爆者の苦しみを伝える展示を見て「悲惨さが身に染みた」と話す。19年には来日した教皇フランシスコが核廃絶を訴えたこともあり、「その思いをさらに広く伝えなければ、と考えた」という。手紙は52ページ。ホワイトハウスやバイデン大統領の政策スタッフ、連邦議会議員、他の聖職者らに送った。

送付した先月は、米英仏中ロの核保有5大国が「核戦争に勝者なし」という共同宣言を発表。核の開発から使用までを全面的に禁じる核兵器禁止条約が発効1年を迎えるなど核軍縮問題が注目を集めたが、ロシア軍がウクライナ国境に集結するなど、新たな紛争への懸念も高まっている。

ウェスター氏は「米国にはウクライナ問題で核兵器の選択も排除すべきではないと主張する政治家もいるが、私はそういう考え方には反対する。私はそのうえで手紙を書いた」と強調。「戦争だけでなくテロや事故、サイバー攻撃など、核によってわれわれが破滅する可能性は常にあります」と指摘した。

◆「米国を悪く言いたいのか」と反発されても

- ウェスター大司教の手紙の要旨**
- 2017年に広島と長崎を訪問し、原爆の惨状に深く胸を痛めた
 - 核軍拡競争は終わりのない邪悪な循環だ。危険性は冷戦時代よりも高い
 - ロスアラモス研究所などがあるニューメキシコ州で核軍縮を唱える意義は大きい
 - 核兵器の近代化や維持には巨額の費用が必要で、貧しい人々への資金を奪い続けることになる
 - 核兵器禁止条約を支持する

同氏はカリフォルニア州サンフランシスコ近郊にあるミサイル基地の近くで生まれ育った。米国と旧ソ連が核戦争の瀬戸際で対峙(たいじ)した1962年のキューバ危機時は12歳。

「学校の帰り道に飛行機を見ると、ソ連が爆弾を落としに来たんじゃないかとおびえた」という体験も、核廃絶を訴える背景にあるという。

手紙に対してはカトリック関係者らから好意的な反応が相次ぐ一方、ホワイトハウスやバイデン氏からの返事はなく、一部からは「あなたは米国を悪く言いたいのか」といった反発もあったという。

だがウェスター氏は「核廃絶への道のりは長いものになるだろうが、決して不可能ではない」と決意は揺らがない。「化石燃料から自然エネルギーへの移行で多くの仕事が生まれれば、核兵器関連産業の人々も職を得ることができる。破壊のための爆弾をつくることから命と生活を守る技術に移ってほしい」と話した。